
Something Special

～特殊メイクと特殊造形物への挑戦～

第1章 プロジェクトの目的と概要

1. プロジェクト目的

本プロジェクトではシリコン・樹脂といったような扱いの難しい素材の研究と、特殊メイク・特殊造形物制作の技法研究を主な目的としている。現在では日々、様々な素材が開発され、特殊メイクやアートの現場では次々と新素材が取り入れられ、制作が行われている。その状況の中で、大学生である私たちが授業内でそれらの素材を扱うことは非常に稀で、使用する素材は限られている。その要因としてはそれらの素材が非常に高価であると共に、それらを扱うには高度な技術が必要であることが挙げられる。しかし、現状のまま、これらの素材に対して手をこまねいては表現の選択肢がいつまでも広がらない。よって、本プロジェクトで得た知識や経験は最終的に大学全体に還元し、学生あるいは教員の制作において、その方法の一選択肢として共有されることを目標とする。

以上が昨年度からの本プロジェクトに基本的な目標であるが、本年度は上記の「本プロジェクトで得た知識や経験は最終的に大学全体に還元し、学生あるいは教員の制作、また教材研究の一選択肢として共有されることを目標とする。」という箇所に重点を置き、本学の学生に対して昨年度に得た知識・技法を普及させることを目標とする。

2. プロジェクトの概要

「1. プロジェクト目的」にある通り、昨

年度に得た知識・技法を普及させるために、本年はリアルマスクを制作する講座を開設し、参加者を募集した。その講座では、有名人のリアルなマスクを制作し、完成後は藤陵祭においてマスクのモデルとなった人物に仮装してパレードを行う。マスクの作り方や仮装後の写真は2章以降に掲載する。

また本プロジェクトの評価として、参加した学生と作品を見た方それぞれアンケートを実施する。実施内容と結果については第3章にまとめ、本プロジェクトの評価と反省の材料とする。

3. 代表者および構成員

・代表者

上路 市剛 美術領域専攻 3 回生

・構成員

稲岡 秀真 美術領域専攻 4 回生

田中ひとみ 美術領域専攻 4 回生

桐田 知佳 美術領域専攻 3 回生

4. 助言教員

小林 良子 先生 (美術科)

第2章 内容や実施経過など

1. リアルマスクの技法について

今回制作したリアルマスクは特殊メイクの技法を用いた制作を行っている。マスク自体は特殊メイクではないが、特殊メイクと同等の制作方法で作られている。特殊メイクは人口皮膚とも呼ばれるアプライエンスという、シリコンやラテックスのパーツを皮膚に貼り付け、境目を極限まで目立たなくした後に、ドーランやスキンイラストレーターなどの着色剤を用いて色をなじませ、メイクを行う。これはメイクのモデル(役者)の身体の形をベースに作られるため、生々しい見た目で、あたかも本物であるかのように表現することが出来る。しかし実在しているかのようなリアリティを表現するためには、メイクを施し

たことがわからないように処理を行うことが重要である。メイクを施したことがよくわかる個所とは、モデルの皮膚とアプライエンスのエッジの境界であり、その境界を出来るだけなじませるためにアプライエンスには特殊な方法で加工を施す必要がある。

境目をなじませるためにアプライエンスのエッジは厚みを出せる限り0に近づけなければならない。そのような加工を施す方法として、型でエッジをねじ切る技法を用いる。以下にはその具体的な方法を写真や図を交えながら解説していく。

2. リアルマスクの制作過程と技法

①モデルのライフキャスト（顔型）をとる

アルジネイトと呼ばれる印象材を石膏包帯で補強して顔の型を取る。型の内部に石膏を流し込みライフキャストを制作する。



②ライフキャストの上に彫刻を行う。

ライフキャストの上にNSP油土と呼ばれる特殊な油土で彫刻を施す。

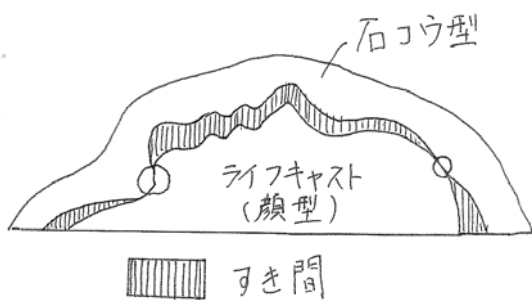


③彫刻の型を取る

石膏で彫刻の型を取る。型取りの際に邪魔になる個所はあらかじめ粘土で覆い隠しておく。また全体をラッカースプレーで塗装する。脱型後は彫刻を行った粘土は除去する。



この段階で、ライフキャストと型の関係は下図のようになっており、粘土を取り除いてできたすき間が出来る。ここで重要なのは下図の○印の箇所である。この箇所はライフキャストと型が直接触れている箇所である。これは特殊メイクのアプライエンス制作において非常に重要な技法であり、この箇所で、内部に流し込む素材をねじ切り、厚みを出来るだけ0に近づけることが出来る。



④シリコンを流し込む

型の彫刻を施した箇所に、着色したシリコンを流し込む。シリコンを流したらすぐにライフキャストをはめ込み、余分なシリコンをねじ切る。シリコンが硬化したのちに、発泡ウレタンを流し込み、ライフキャストとのすき間を完全に埋める。



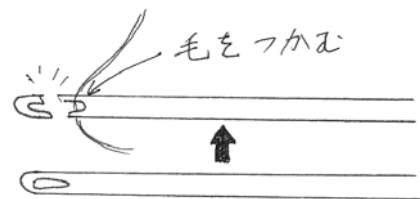
⑤着色を行う

シリコンに油絵の具で着色したものを塗料として着色を行う。またこの時に義眼も同時に制作する。



⑥植毛をする

ビーズ針の糸を通す箇所を加工しパンチングツールを自作する。下図の箇所に毛を挟み、シリコンに差し込み毛を植える。





⑧完成

完成後のマスク、また仮装の様子は最終項に掲載。

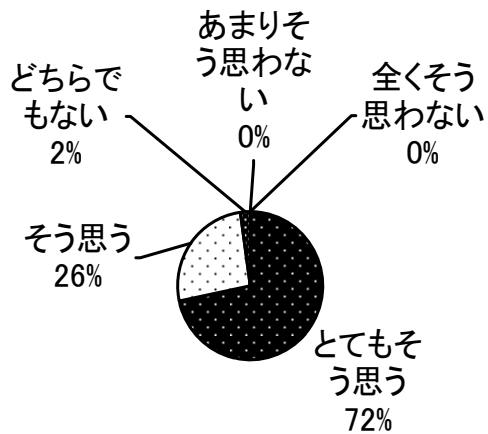
第3章 結果や成果

本プロジェクトでは藤陵祭にてパレードを行った時と、深草総合庁舎での展示を見ていただいた方と対してアンケートを実施した。これらのアンケートをもとに本プロジェクトと制作物の評価を行う。以下にアンケートの設問とそれに対する集計結果をまとめる。

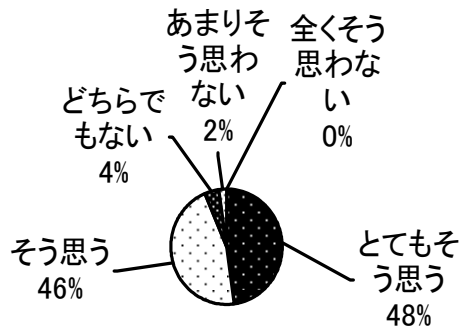
・藤陵祭・深草総合庁舎でのアンケート

1. この企画についてどのように感じますか？

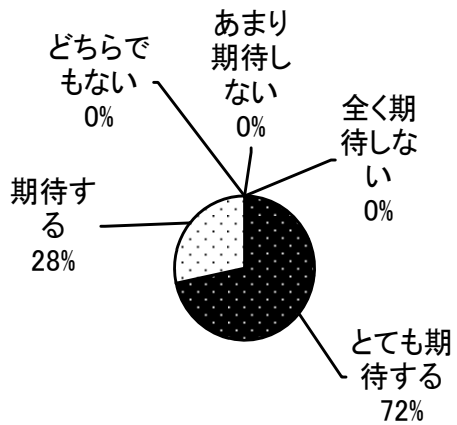
①興味を持てる



②モデルの役者に似ていると思いますか？



2. 本プロジェクトは今年度で終了しますが、来年もこのようなプロジェクトを行うとして、あなたはそれに期待しますか？



以下は京教生へのアンケートです。

3. 質問2で「5期待する・4どちらかという期待する」と答えた方に質問です。来年このようなプロジェクトを行うとしてあなたは参加してみたいですか？

回答人数	32人
YES	15人
NO	11人
答えたくない	6人

第4章 まとめと反省、今後の展望

①制作物について

今回制作したマスクについて、素材の扱いや彫刻のテクニックの面においてまだまだ不十分な点が多い。アンケートにもあるように、モデルとなった人物に似ているかという質問に対して、「とてもそう思う・そう思う」と答えた方が全体の94%であることから一定のレベルで成功していると考えてもよいのだが、モデルの人物と見比べるとその差はかなりのものである。仮装して、顔面以外にモデルの人物の要素を加えて、やっとな「似ている」と評価していただいたにすぎず、まだまだ課題が残る形となった。

また、マスクというものは表情を変えることが出来ないため、どのように制作しても不気味な感じになる。実際に藤陵祭でのパレード中、悲鳴を上げて逃げってしまう人や、“怖い”と後ずさりしながら引いてしまった人もいた。もし今後マスクを制作するのであれば、その特性と表現方法を十分に考えたうえで、より自然な表現をとる必要があるだろう。そのためには今回使用した素材をより十分に使いこなすこと。彫刻の技術をもっと突き詰めること。他も素材でより適したものがないか。などが今後の課題として挙げられる。

②プロジェクトについて

アンケートの結果より、本プロジェクトに“興味を持てる”という質問に対して「とてもそう思う・そう思う」と答えた方が98%また“本プロジェクトは今年度で終了しますが、来年もこのようなプロジェクトを行うとして、あなたはそれに期待しますか?”という質問に対して「とても期待する・期待する」と答えた方が100%に及んだ。これは本プロジェクトとしては大変うれしい結果である。周りからの期待度も高いことから、その期待に応えて、来年度も続けることが出来れば幸いであると考えている。加えて、アンケート

より、京教生への質問として“質問2で「5期待する・4どちらかという期待する」と答えた方に質問です。来年このようなプロジェクトを行うとしてあなたは参加してみたいですか?”という質問に対して、回答人数32人中15の方が「YES」と回答した。今年度のプロジェクトでは、実際に制作してくれた学生は計4人であり、これの勧誘には非常に手を焼いた。ほとんどの人がやってみたくて名乗り出てくれることなく、4人とやや少なめの人数となった。今回アンケートをとって初めて分かったのだが、美術領域以外にも関心を寄せてくれる学生はある程度いる。実際に制作に入れば、やはり多少なりとも制作に携わっている人の方が良いだろうと判断して、今年度は美術領域内だけしか勧誘しなかったのだが、より広く声をかける必要があった。また参加の形態も、制作することを要求せずに、マスクをかぶる役者として参加してもらうなど、色々な方法があったのではないかと思う。

H24年度のプロジェクトは技法研究中心で非常に個人的なものとなってしまった。そのことから本年度は第1章にある通り「本プロジェクトで得た知識や経験は最終的に大学全体に還元し、学生あるいは教員の制作、また教材研究の一選択肢として共有されることを目標とする。」という箇所重点を置き、本学の学生に対して昨年度に得た知識・技法を普及させることを目標とした。その結果、計4人の参加があり、H24年度より外に開けたものとなった。しかしながらアンケートの結果にある通り、まだまだ不十分な点があったため、来年度も機会があれば今回の反省を踏まえて、より多くの学生に参加してもらえるように改善していきたい。

●仮装の様子@藤陵祭

今回制作したマスクのモデル：

ハリーポッターシリーズから

ハリー・ポッター、ハーマイオニー・グレンジャー、ロン・ウィーズリー

テニスプレイヤーのシャラポワ



●深草総合庁舎での展示の様子

11月24日に深草総合庁舎で展示を行った。その際、ポスターと実際の作品を展示し、アンケートも設置した。

